



2010年5月15日 第78号

発行：いたばし水と緑の会 事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
<http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

エコ生活だった昔の農家（２）

前号にて私の育った家では、殆どの燃料を自給していたことを書いたが、何時何処ら辺りの事だったのか、との質問があったので触れてみたい。実家の所在地は埼玉県比企郡川島町（カワジママチ）合併して町になった6カ村の1つ、昔は三保谷村。254号線を川越市街の北のはずれで12号線に入り、桶川方向に向かって釘無橋（入間川と越辺川）を渡った処。町の名前は昔からこの地区を呼んでいた名前で、この地域が荒川とその支流の市野川（イチノカワ）、入間川それに越辺川（オッペガワ）と4つの川に囲まれて恰も島状態だった故だろう。こんな立地条件から平坦な土地であることは容易に窺がえるのではないだろうか。（市野川の上流にはヒカリゴケでも知られている観光地「吉見の百穴」がある）

終戦当時私は国民学校6年生であり、4年生あたりから高校卒業まで、つまり昭和18～26年ころ農家の作業を手伝っていたことになる。60年も経ち記憶が断片的だが、生活を思い出して書き加えたい。

環境と生物

当時越辺川は釘無橋の上流（落合橋の下）で合流していたので、橋は1本の川の部分だけに架かっていたので、川越市に行くには土手を2つ上り下りした。橋は丸木の杭を打って板を並べたもの（50年前の笹目橋も同じようだった）で、大雨で増水時にはよく流失したものだ。すぐ上流が曲がっていたので橋のあたりは片側に広い砂州があり、格好の水遊び場であり、道路に撒く

講演会のご案内

テーマ：「生物多様性」って何？

地球の自然環境をどうやって守っていくかを議論する国際会議「生物多様性条約第10回締結国会議（COP10）」が10月に愛知県名古屋市で開かれ、日本は議長国です。「生物多様性」は人類の存在基盤、私達に何が出来るか考えませんか。いたばし水と緑の会・エコポリスセンター共催です。申し込みは事務局瀬田3969-7124またはエコポリスセンター5970-5001まで。

とき：6月5日（土）10時～12時

ところ：グリーンホール403会議室

講師：環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室 中澤 圭一

砂利や砂の採取場でもあった。家からは少し離れていたため、ここまで泳ぎに行くのはまれだったが、橋や淵の崖から飛び込んだりもした。漁業権を持った人が鮎漁やマルタ漁などもしていた。また、早春や秋などに河川敷の畑で作業したとき、川の水を飲んだこともあるほど水は澄んでいた。

人間川の支流の安藤川（幅5～6m）が家の近を流れていて、ここが釣りや水遊びの中心だった。川底にはコウホネが自生していて、水位を上げた夏に葉や花茎を伸ばし水面で黄色い花を咲かせていた。岸のハンノキの間から釣り糸を垂れて鮎やハヤ（と言っていたがモロコか）鰻や鰻など色々な魚が釣れた。鰻を捕るのは篠竹の根元近くに4、50cmの水糸を結び、大きな釣り針に太いミミズ（ウタウタミミズと言った）を付けた置き針を、夕方川に仕掛け、翌朝に引き上げる方法や、ドウと称する竹で編んだ筒状のトラップも使った。夏に川をせき止めた所（堰切・セキリといった）では湿って水コケの生えた堰の壁や板を、数センチの幼い鰻がうねうねと這い上がっていた（2人で手ぬぐいを広げて捕まえたりした）。

鰻は大きな針だけ付いた釣竿で、ウタウタミミズの餌を水面にちょんちょんと漬けたり離したりして釣ったりもしたが、戦後増えてきた雷魚釣りにも使った。雷魚は寒冷時には背戸の川（幅2～3m）の向う岸近くでじっとしているのを、そっと近寄って銚（ツキブシと呼んだ）で突き上げるように突いた（皮が硬くて力を要した）ものだ。背戸川にはカラスガイがいて、水の澄んだ季節に竹の枝先を挟ませて吊り上げた。

安藤川にはカワニナがいて夏の夕方に蛍が飛び交っていたし、秋に水を浅くしたあとにはシジミも獲れたものだ。岸边の一部に植えてあったクヌギには、カブトムシやカナブン、オオムラサキやキマダラヒカゲチョウ？やスズメバチなど、樹液を吸う虫が集まっていた。川岸のハンノキにはニイニイゼミやアブラゼミがいっぱいいて、時々ヤブキリギリスがアブラゼミを捕食していた。夕方のヒグラシは寂しく感じ、ホウシゼミには秋が近いことを知らされたように思う。

今は殖え過ぎて困り者のザリガニは、戦後5年くらいまでは見たことが無く、伊佐沼（川越市の北東部）に親戚のある友達が、ザリガニを釣りに行くと言ってくれ、生まれて初めて見たり釣ったりした。何年もしないうちに家の近くの水辺に沢山棲むようになり、背戸の川でバケツに一杯簡単に釣れるようになった（餌はトノサマガエルの皮をむいた脚）。

田んぼに張り巡らせた用水路にはミゾソバなどの水草が繁茂していて、直径と深さが50cm

郷土資料館に展示されている農具：写真左クルリボウ（柄をもって振り下ろし雑穀を脱穀する）とスキ 写真右：箕（上下にゆすって少量の穀物を選別したり、持ち運びに使う）



位の箆を使って小魚を捕まえたが、体が暗緑色で尻尾が赤や紫の綺麗なチョウセンブナが時々捕れたが、その姿を見ていない(インターネットでは観賞魚として扱っている)。タガメやミズカマキリやタイコウチ、ゲンゴロウやマツモムシやミズスマシなど色々な生き物がいた。秋遅く用水路が干上がったとき、最後まで水のあった処を手で掘り起こすと大きなドジョウや、タニシがたくさん越冬していた。

藁細工など：

稲藁の用途は燃料や牛馬の餌・敷き藁などのほか、縄や筵、俵、など農業用資材があり、冬の間の藁作業が土間で行われていた。玄米は藁で編んだ俵で保管し、蚕が繭を作る時のマブシも蛇腹状に編んだマブシのほかに、藁をジグザグに折りたたんだだけの簡易マブシがあり、左右のハンドルを交互に内側に倒して藁を折りたたむ器械操作に、子供は興味をそそられた。縄や筵などは藁を軟らかくして使うため、木の臼を逆さまにした上に置いた藁を杵で叩いたが、藁束を持って回す役目は大抵子供がやらされた。藁縄は足踏みの器械で絞っていたが、後にモーター駆動方式に替わった。

隣の小父さんは多趣味で、投網も持っていて前記の川魚漁をしていたし、垣根にした茶の木から毎年初夏には庭でお茶を作っていたのを、長方形の大きなホイロの傍で眺めた。この人、シャモも飼っていて冬の天気の良い日などには、筵で囲んだ中で仲間の鳥と戦わせていた。また、器用な人で柿や栗・桃・柚子の木などの木を接木して果樹を育てていた。今の私が果樹や花木を接いだり挿したり、楽しんでいるのは小父さんに感化されたようだ。

食生活

普段の主食は米に押し麦(裏作の大麦を加工)を少し混ぜたものを食べ、白米のご飯は特別の日だけだった。米は大切な収入源であるから、出来るだけ供出していた。蛋白源には田んぼの用水路や川で捕れた雑魚と、大豆(田の周りの道端にも植えた)だった。雑魚は沢山捕れると串に刺して焼き、弁慶(藁を束ねたツト)に挿して天井から吊るして保存食にもしていた。タニシの味噌煮もよく食べた。

郷土資料館に展示されている農具：写真左トウミ(手回しで風を送り穀物を殻やゴミと選別する)写真右(田の除草機(左側)、千石(右側、網の目の大きさによって玄米を粃やクズ米と分別する)。



ザリガニは茹でて皮をむいてしょうゆ味で食べたが、今の小エビと変わらないのではないかと思う。頭の部分は碎いて鶏に与えたが、卵の黄身が赤味を帯びたのを覚えている。

鶏は庭に放し飼いにしている卵が取れたが、卵を産まなくなると物日などに潰し（殺して）胃袋に収め、適時に雛を孵して更新していた。ウサギもペットではなく肉は蛋白源であり、毛皮はチョコキの裏張りになった。肉になってしまえば美味しく頂いたが、生き物を潰すところは見たくなかった。ヤギも飼っていたときがあり、やや黄色みのある乳に少量の塩を入れて沸かして飲んだ。

陸の肉と言われる大豆は豆腐や油揚げではなく、水に浸して摺り鉢で摺って味噌汁に入れ、野菜を沢山入れた呉汁としてよく食べた。

裏作は大麦より小麦の方が多く、自家製の粉でうどんを打って毎晩のように食べていたが、これも米の消費を減らす知恵から習慣になったものであろう。当初はもっぱら手打ちだったが、ローラーを手で回す器械が出来てきて、子供にも簡単に作れるようになって作らされた。冬は生うどんを具沢山の汁に直接入れたニボウトウと呼ぶ暖かいうどんを、夏には自家製の白ゴマをたっぷり炒って摺り鉢で摺り、味噌を加え薄切りのキュウリも入れて透明になるまで擂粉木で搗き、井戸水で適宜薄めた付け汁に茹でてうどんを漬けて食べた。これをスッタテと呼ぶが、暑くて食欲のない夏にも食欲が出て栄養的にも優れた食べ物だ。うどんは長いので縁起が良い食べ物とされ、会食時には欠かせない食べ物で、温かい澄まし汁にうどんを漬けて食べてお開きとなる習わしが続いているようだ。うどんにはナスやインゲン等、茹でた季節の野菜を添えて（カテと称す）出されることが多く、野菜を食べて口休めにすると同時に栄養のバランスをとっているようだ。そういえば、当時トマトは食事の菜とすることは無く、丸齧りで食していた。胡瓜は大きくそだった実の皮を剥いて2つ割りにし、種を取ってから薄切りして食べた。

我が家では夏にスッタテでヒヤムギやソウメンを食べ、田舎の伝統食を受け継いでいるが、暑い時期には定番のお気に入りの食べ物になっている。スッタテを更に薄めて汁物（キュウリモミとかヒヤジル）として、ご飯に添えて食する事もあった。いつでも氷がある現在では本当の冷汁が簡単に食べられる。

大豆があれば作れるのが味噌や醤油で、すべて自宅で作っていたが、醤油の搾り器は近所で共用していた。大きな醤油のモロミ樽が日当たりの良い軒下に鎮座しているのが、冬の風物詩だったように思う。味噌は米ではなくて大麦を使っていたので、味噌漉し作業が必須だった。味噌は野菜の保存食としての漬物にも使用していたが、弁当のご飯にナスの味噌漬けが好きだった。特

郷土資料館に展示されている 左：竈、中央：石臼 右：米俵



に味噌の味が染み込んだナスが滲みだしたご飯は、梅干（日の丸弁当）より格段美味かった気がする。

暮れには正月用の餅をどこの家でも木の臼で搗き、町に出た親戚が帰郷時に切り餅を持たせていた（餅を上げるのがお年玉の起源だとか）。自家用の餅は3ガ日だけ白い餅だったが、以降はシンコモチ（売り物にならない粳米を粉にして搗いた褐色の餅）をたくさん食べさせられた。この餅は上あごに引付き、なんとも苦手な代物だった。雑煮には自家製の根菜類、サトイモや大根などが沢山入っていたのは言うまでも無い。

3月と5月の節句には近くで摘んだ餅草（ヨモギ）を入れた草もちを搗いたが、餡にはアズキやササゲだけでなく粒の大きいアンコブズと呼ぶ赤いサヤの実も使っていた。

暮れの餅は沢山搗いて保存用のカキモチを作り、春先までのおやつに焼いて食べていた。

物を大事にすることは徹底していたが、戦後は毎日のように食べ物を求めて都会の人たちが買い出しに来た時代だったから、食べるものには困らなかった事に感謝しなければならない。

春の野草もセリやフキノトウなど手近なところで得られたが、草もちに入れるヨモギとタケノコ（家ではマダケ）以外は余り食べた記憶がない。野菜は葉物・果菜・根菜がふんだんに作られていたこと、家に年寄り（祖父母）が居なかったので、余り手のかかる作業を敬遠していたのが原因のようだ。

夏には無花果、秋には柿、石榴や栗・胡桃・栗なども食べ、初夏には子供はクワの実（ドドメ）を桑畑で頬張り、口の周りを紫にし、晩秋には柿ノ木に登って甘い実を食べ、渋柿は軒下で干し柿を作っていた。冬には蒸かし芋（オイランとも言った太白種）庇の瓦屋根で干した乾燥芋がたくさん作ってあって、学校から帰るとポケットに詰め齧りながら遊びに行ったものだ。

当時は休耕田や休ませた畑などはなく、河川敷でさえ桑やサツマイモの畑で使っていた時代だった。

あとがき

板橋区内でも私が転入した50年前には、家の近く（徳丸6丁目）の不動通り側斜面はクヌギと一部コナラの林が残っていた。間もなく宅地化で消えたが、当地で炭を焼いていたかどうか定かでない。私の実家のあたりに比べ土地の起伏があり、斜面林が多く燃料には恵まれていたのではないだろうか。徳丸や西台は街に近いので農産物を直接街へ売りに行ったそうだが、農家の生活は似たようだったのではなからうか。昭和20年前後の農家の生活は何処も質素を旨としていたから、いまは実に豊かになって、「もったいない」と言う言葉を忘れた感があるが、このような生活が何時までも続けられる保障はないのではなからうか（猪鼻 昭二）

石神井川に魚を一流れを見つめて10年

平成22年3月11日、久しぶりの晴天、石神井川観察に出発する。家を出て東上線中板橋（駅名でなく橋名）を起点に王子駅まで約2時間川沿いを歩き、気のついた事を何でもメモする。特に川の流れ、コイ・水鳥の有無など。遊歩道、並木など四季の変化に富み野趣豊かで自然の好きな方には是非お薦めしたい。歩き始めてから今年で11年になる。途中から雨天決行を実行した。これで川の姿を知ることが出来たようである。雨の降り始め、豪雨の際などは、川の全体像を知るのに貴重な体験であったし、川は川を取り巻く街の様子も知らせてくれた。

この10年、川そのものの改修工事があり、沿岸では家の改築や学校、病院の建設など大きな

環境の変化もあり、時々刻々と変化し続けていることを実感させられてきた。

今年は水鳥の飛来が少なく、中板橋あたりでツグミなど水鳥でもないものが川中の植栽ブロックで見受けられた。また、帝京大学付属病院前で色ゴイ（50cm）とマゴイ計4匹がおり、正月を越してくれた。まさに「越してくれた」である。川に「コイの姿を見つけることができる」と「出来ない」では川への愛着度がたいへん違う。板橋区内でコイが見られるのは此処だけである。また昨年秋緑橋（金沢小学校裏）下に水草（カナダモか？）が10株以上ゆらめいていた。川底に藻が生えているのは石神井川の板橋区・北区でここだけ。藻の発生は10年間で2度だけ。今日はそれを確認できなかった。コイ、藻が生き続けられるのは自然の川底で、コンクリートの三面張りではない。生き物を呼び寄せる河床工事が何度が行われてきたが成功していない。「自然は文明よりも大きい（中西悟道）」

石神井川を自然に戻したい。念願悲願である。まだ環7が出来る前、水草のゆれる流れを膝上まで濡れながら魚を追いかけた。清らかな水が豊かに流れ、桜並木が美しかった。

岩波文庫・李白詩選で「板橋駅・板橋郷」の文字に出会った。李白は奈良時代に生きた中国の大詩人である。「清溪の主人に宿す」「清溪行」などと清溪の地名が出てくるが、この清溪とは、板橋郷・板橋宿のことであり、長江の支流5里ある宿場であると言う。

詩に言う。「夜に入り、清溪のほとりに宿る・・・寝室の枕辺には、さわやかな風と水の音が響いてくる。やがて月が西の山かげに沈んでゆくと、悲しげに夜の猿が鳴き始めた。」

その昔石神井川と川のほとりに住む人々。川を下り荒川から海へと旅に出る。我が住む板橋も李白の詠んだ清溪の地であった。「清溪のうた」に言う。「清溪は我が心を清くす 水色諸水に異なり 人は行く明鏡の中 鳥は渡る屏風のうら 空しく遠遊の子を悲しましむ」

李白の詩集を手には江戸の昔旅人が石神井川を清溪になぞらえて旅をしたのかも。

コンクリート、アスファルトの街ではあるが、清溪の自然を取り戻したい。



今の台橋

河床への工夫 自然相手は最もむずかしいものの一つではなからうか。練馬区の湿化味橋下に約1m幅の溝が川底に掘ってある。板橋区の山崎橋下流には豆腐型に掘りこんであり、下頭橋から東橋まで川底に植栽のブロックがあるが、一部を除いて期待の効果があがっていない。山崎橋

付近では泥とゴミばかり。久保田橋では当初のヨシ、ガマはなく、セキショウが根付いて元気で、しかも集中豪雨に流されない自然発生の緑化である。中板橋に魚巢（大雨時の魚の避難場所）の穴が作られたが、砂礫に埋まって役に立っていない。

自然の河床である御成橋（旧中山道板橋の二つ下流の橋）下流から緑橋まで、コイがおり時には水草が生え、水鳥も多く見られる。また人家も少なく樹木草地も多い。

このあたりは蛇、アオダイショウがいる。毎年見る。時にはそっと指で撫でる。春の暖かい午前中、長さは1m位。Wさんは1日に大小5匹見たと言う。植え込みで、柵で、水面で、鳶に。鳶は川と地面を行き来する蛇の道路である。ある日、蛇を知らせたら別に驚く風もなく、見慣れているという事だった。ずっと上流の都立城北公園辺りでは保健所まで出る騒ぎとなった。ヘビは地を這う小動物の頂点に立つ、鳥類のタカと同じで、それだけ御成橋から北区滝野川橋まで流域に自然が残っているのだろう。

小鳥たちもしたがって多いが、エコポリスセンターや野鳥の会のみなさんが詳しく調査されているので省く。

水中の生物も区土木部で毎年調査され、結果が報告されているが、私は地上からの目視で10年間コイの記録をメモしてきている。コイはすべて観賞用の飼育されたもの、大きさは70cmから小さいもので20cm。色ゴイ、マゴイ、一匹ごとに花子、太郎、次郎、ゴマ、レッド、ホワイト等々と名前をつけ、いつ、どこで確認したかを記録してきた。1月から観察してしばらくいるがほとんど12月で姿を消し、下流へ、隅田川へ流され、それっきり戻ってこない。花子と名付けたコイは1年近く御成橋 緑橋間で姿を見た。正月も越したが、増水で流されてしまう。

緑橋下に柳が育つ州（写真下）があるが、増水時に渦巻きが出て、渦に乗った魚が流されずに留まることがある。川が曲がっているところは、魚たちの大切な場である。洪水防止に直線の流



れも必要であるが。

この辺りは家政大、金沢小学校など緑を維持出来る場がある。が、まだ沢山課題がある。樹木が単調、トンボがいない、水草がない、水に手を触れることが出来ない、川に小魚の姿を見たい、そして投棄ゴミをなくしたい。3月業者が川浚えをしていた。「ご苦労様、ゴミの量がずっと減ったでしょう」と声を掛けた。業者の方は黙って指をさした。トラックには自転車3台あった。ビニールの大袋も。

しかし、川沿いの道は10年前より格段にきれいになってきている（常盤台在住 榎橋 健造）

総会の報告

4月17日（土）14回目の総会。腰をいためられ欠席された鈴木信子会長からカンパを頂戴、ビール少々で、生物多様性勉強会、崖線樹林地の保全についての勉強会、湧水地を守る取り組み（シンポジウム）、宍塚（つくば市）の里山を見にいくなど盛りだくさんの計画を話し合いました。

活動のお知らせ

運営委員会は原則として第4土曜日の作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。どなたでもお気軽にご参加ください。午前中の作業の状況で時間が多少ずれることがあります。雨天で作業が中止の場合も運営委員会は開きます。わからないときは、坂本(090-4618-1295)に御連絡下さい。

5月運営委員会： 5月22日(土) 12:30~13:30

6月運営委員会 6月26日(土) 12:30~13:30

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：7月17日(土) 12:30~

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは事務局瀬田(3969-7124)まで

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったピオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ピオトープの環境整備を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

活動日は毎月第3、第4土曜日です。軍手、タオルなど、汚れてもよい服装で。あればカメラ、ルーペ、双眼鏡、図鑑。雨の場合は作業のかわりに全体の観察とゴミ拾い。

5月22日(土) 10:00~12:00 バッタ広場柵作り

6月19日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈等と生き物観察

6月26日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈等と生き物観察

7月10日(土) 10:00~12:00 バッタ広場植生調査

7月17日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈等と生き物観察

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

成増4丁目緑地調査(植生調査)(日程が変わる場合もあるので事務局まで連絡下さい)

6月12日(土) 10:00~12:00 東上線成増駅集合

7月3日(土) 10:00~12:00 東上線成増駅集合

成増4丁目緑地で区画を決めてその区画の植生を毎月調査・観察しています。ついでに成増にある公園になった樹林地の観察も行います。(連絡先)坂本090-4618-1295

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な用途は、会報郵送料、印刷費、ピオトープ維持管理のための資材費、コピー代などです。